

平成17年度

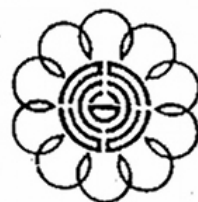
## 第37回 越谷市民文化祭

平成17年11月17日(木)～20日(日)

10:00～19:00(最終日は18:00)

### 郷土研究の部・展示作品紹介

於 越谷コミュニティセンター 大ホールホワイエ



- ◇周りの10個の輪は、昭和29年11月3日に合併した十町村である二町八ヶ村(「越谷町」の誕生)をあらわす。  
 十町村とは、越ヶ谷町・大沢町・桜井村・新方村・増林村・大袋村・荻島村・出羽村・蒲生村・大相模村をさす。
- ◇中央部周りのデザインは、カタカナの「コ」を4個集めたもの。つまり、越谷の『越』(「コ4」)を意味する。
- ◇中心部のデザインは越谷の『谷』の文字を図案化したものである。
- ◇昭和30年11月3日には、草加町に合併していた川柳村のうち、伊原、麦塚、上谷が越谷町に入る。
- ◇越谷町は、昭和33年11月3日に市に昇格し、越谷市となる。

### 郷土研究の部・展示作品リスト

番号	題名	頁	出品者名	住所
1	大袋駅・その周辺の今昔	1	青山 栄吉	袋山
2	戦後六〇年の幻の荻島飛行場	3	磯谷 知子	南荻島
3	旧南百・四条・別府・千足村の石仏	5	加藤 幸一	春日部市大枝
4	越ヶ谷宿の大澤に泊まった伊能忠敬	15	金岡由紀子	大房
5	越ヶ谷音頭	16	高崎 力	平方
6	大沢の天神前土橋	21	谷岡 隆夫	宮本町三丁目
7	切橋の名前の由来	22	増岡 武司	東越谷七丁目
8	大昔の越谷は海だったか	24	宮川 進	千間台西二丁目

※右の展示作品に関する問い合わせ先は、

NPO法人・越谷市郷土研究会の宮川進(当会会長・☎97519139)までお願いします。

※14頁に「郷土越谷散策スタンプリリー」の紹介があります。

# 大袋駅・その周辺の今昔

青山 栄木土口

大袋駅前も、越谷市内の他の駅前と同様、大きく変貌をとげている。

## 『大袋駅』

大正十五年十月、越ヶ谷―粕壁（後に春日部に）間の電化工事完了に伴い開設された。その後

- ①昭和四十三年五月、ホームを二つに（上りと下りを別々に）する工事
- ②昭和六十一年四月、二つのホームを跨いで渡るブリッジ・スタイルにする工事などをおこない、駅舎も新改築し現在に至っている。

## 『駅周辺の開発状況』

- (1) 地域の開発は、鉄道や道路がどのように通っているか等が影響してくる。東武沿線も、駅が設置された周辺から開発されていったが、このテンポを早めたのが、昭和四十年営団地下鉄の東武線への乗り入れだった。

- (2) 地域開発と人口の増加は、大きく関係している。越谷市及び大袋地区の人口増加状況を時系列に並べると、次のように昭和四十年を境に増加傾向を強めている。

人口の推移

年 度	越 谷 市		大 袋 地 区	
	総人口		総人口	
昭和三十五年四月	四九、四六〇人			
四十年四月	七〇、六〇〇		八、六六二人	
五十年四月	一九〇、〇九九		二一、六九五	
六十年四月	二四八、四三五		三六、二二七	
平成十年四月	三〇二、三六八		四五、九八一	
十六年四月	三一六、四六六			

(注) 大袋地区は、恩間、恩間新田、大竹、大道、大道新田、三野宮、袋山、大林、大房の合計で越谷市内数。尚数字は市役所集計のものを使用。

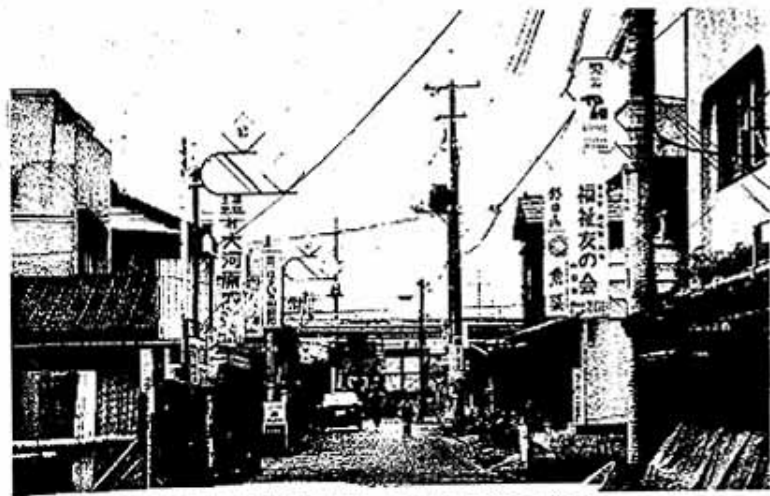
写真の提供者は、袋山在住の小島 正氏です。



昭和38年大袋駅前(東口)の民家(駅は奥の方)



昭和38年の大袋駅舎(東口)



上の写真と同じ場所から見た最近の様子



昭和39~40年頃の風景(駅側から東方面を見る)

## 2. 戦後六〇年の幻の荻島飛行場

磯城公知知子

今年、昭和二〇年に日本が連合国のポツダム宣言を受け入れ、不戦の誓いの下、平和国家の道を行くから六〇年の時が流れた。還暦を迎えたのである。

かつて、越谷から岩槻にかけて陸軍の飛行場があった事実が忘れられようとしている。しかし、今もなお兵舎や蓋をした暗渠(※)、飛行場の一部の施設の跡が残り、当時の滑走路や誘導路が道路として利用されている。越谷の荻島村から岩槻の新和村にまたがる飛行場であった。地元では通称「荻島飛行場」「新和飛行場」などと呼ばれた。また飛行場敷地の大部分が新和村の論田地区にあったので「論田飛行場」とも呼ばれた。

終戦の前年、昭和十九年七月に地元の農家十三軒が陸軍から呼び出されて強制的に立ち退かされて飛行場の建設が始まった。当初は飛行場設定隊の七百名によって開始された。その後、近隣の住民の勤労奉仕や動員された朝鮮の人によって炎天の日も雨天の日も人海戦術で突貫工事が行われ、終戦の年の八月上旬に完成した。しかし止まりきれず滑走路北端あたりに不時着した一機(操縦士は岩槻藩主の後裔大岡忠憲氏)以外は一度も利用されず、玉音放送があった十五日の終戦日を迎えたのである。正式名は「越谷陸軍飛行場」という。

滑走路の名残が現在も道路として使用されている。「しらこぼと水上公園」から南に一直線に伸びている道路である。この滑走路の幅は現在の道路よりも広く、三十三間(六〇メートル)で、長さは一五〇〇メートルである。滑走路の北端は、「しらこぼと水上公園」の北隣、越谷西高校の校庭南端あたり、滑走路の南端は、越谷市小曾川の北隣、さいたま市岩槻区末田一七一一(大石重機興業)あたりである。

さいたま市岩槻区末田一四七の田島喜一氏(明治四五年一月一日生)によると、当時の南北に走る「滑走路の東端の側溝の名残が田島家の庭の入口にあって、また滑走路自体の名残が田島家の母屋の西の木造平屋の柔道場の南側に広がるコンクリートである」という。そして「この飛行場は、練習機や戦闘機のような小型飛行機用として建設されたと聞いている」とのことである。「終戦後、滑走路のコンクリートは、東京の業者によって東京の復興のために砕かれてただで運ばれた」という。そのため地元では、田島氏のアドバイスを受けて「その業者から二百円の通行税をとるようにした」という。

兵舎は、滑走路南端の東方の南荻島にある「越谷ホーム」周辺にもあって、その近くにも今でも一カ所残っている。

戦車が通っても壊れない頑丈な蓋がされた暗渠は、滑走路の東西に平行してあり、現在の道路から東西約二〇メートル離れている。特に西側の方ははっきりと残っている。

飛行場の施設の一部(田島氏によると未完成の施設と推定)は、高首根の田圃の中にある「しらこぼとメモリアルパーク」の南方一七〇メートル先にある。高さが一二〇センチ、幅が一五〇センチ、長さが三八〇センチのコンクリート製の何かの台が二個残っている。また、そのすぐ東方にある南北に細長く広がる草むら地は格納庫跡であるという。

飛行機を導く誘導路は、滑走路の北端と南端を東側に突出したカマボコ型で結ばれていて、現在でもその大部分が道路として使用されている。道路以外の使用としては「しらこぼと運動公園」や「しらこぼと水上公園一般駐車場」の一部となっている。

※地元では「めくら暗渠」と呼ばれました。現在は差別語なのでご使用にはご注意ください。  
☆平成十七年八月一日の発行の埼玉新聞の記事「岩槻に「幻の飛行場」」(菊地正志氏)、「岩槻 城と町まちな歴史」(聚海書林)を参照し、田島喜一氏の協力も得ました。

# 幻の荻島飛行場



滑走路のコンクリート跡



道路として使用されている滑走路跡



飛行場の施設の跡

### 3. 旧南百・四条・別府・千疋村の石仏

加藤謙幸一

今回は、東町、つまり旧南百、旧四条、別府、千疋の村々にある石仏類についての調査を考へた。調査の詳細な記録については、東町三丁目にある別府の金剛寺に資料を置かせていただくので、謝辞(無料)願いたい。

なお、平成五年から開始した他地区の石仏調査記録については、西方面(大分県)の動橋(内にある別家(尾手無)に「厚徳」より保管をせよとお願いしている)の石仏を併せて取り扱った。また、他市立図書館にも閲覧である。

#### 旧南百・千疋

##### (一)水神社

水神社は旧南百の鎮守である。平成十七年に吉川県道に面した地から、東町二一六六の南東の西側の丘陵に遷転された。

図1は、源房の先祖が奉納した水神像をお祀りする石塔である。図8から図5まではすべて庚申塔と呼ばれる石仏である。六本の手持つ青面金剛神と呼ばれる仏像を見出し、図6は、宮内省の三郎が描かれていたり、文字だけで済ましているものもある。江戸時代は、全国様々な所でも行われていた信仰である。その中でも図8は、これを記念に建立した人々の名前が刻まれている。その中で鈴木、中村、藤田、清野は地元の人々である。

##### ①江戸時代の「かざり」について

石仏の調査をしていて特に思うことがある。江戸期の庶民には(名字)苗字がないという事が多くあり、通っているが、石仏の調査をしていくと、石仏の奉納者の名字を名刺が刻まれているのをよく見かけ、実は誤りであることが意外として多くある。確かに、江戸時代は武士・公家などには名字を名乗ることが許され、庶民には「姓」(苗字)は公式な場で苗字を名乗ることは許されていなかった。苗字といったら一部の農民の上層部などが「苗字附」を許されていたに過ぎないのである。しかし、一般庶民は苗字をもつことが禁止されたわけではなかった。一部には苗字を持たない人がいて、明治八年の「旧民法字必称新命令」によって地主や僧侶などから初めて苗字をつけられた人もいた。しかし、ほとんどの庶民は、日常生活では苗字のみで呼ばれてはいたが、先祖代々から苗字があったのである。

だが、大正年間に土着の内側の丘陵地の真下に遷転した。また吉徳橋の建設地地にかかると、現在地に移していったのである。

図10は、手裏剣を祀った石塔である。手裏剣とは、ウカノマノマノカミのこと。本来は救助の神様である。井才大と結び付き、水の神として信仰されている。人間の類を持つ、首のないかたむき顔の姿をしているという。図4、5は、護国神である。護国とは、(兵部)兵部(兵部)をすることを示す(兵部)が村に侵入してくるのをまもる神である。明治になって、「護国」(現在の行田市)の飛地である新八瀬村の地に建立された。この四条村は、その八瀬川の二つである。

源房は、平田真盛(「庚申」と申すな、源房と申す)との影響を受け、東側の門人の「庚申」の祭祀地(海神地)を盛んに造立したり、中には今までは、庚申塔に対して「庚申の庚申の庚申を庚申を削って、「源房」と改刻するなどの改刻を繰り返して、飛び地であった四条村とその余波を受けたのである。

##### (2)かざり初祖園の図

図15の石仏は、きなえ初祖園(庚申三三三三〇)の西五五五メートル先の西北の道路と東西の道路の交差点の北西付近にある。「きなえ」が刻まれている庚申塔で、とても珍しい。さらに江戸時代初期に作られた庚申塔としても大規模である。

#### 旧別府・千疋

##### (一)金剛寺

金剛寺は、江戸時代は慈徳寺と称していた。明治の頃になって四条村の妙壽院や三輪寺、野江村の龍王寺を合併して金剛寺と名を改めたのである。境内の太子堂は、舊の四条村の妙壽院にあった。ここは庚申寺で再建したのである。太子堂には尊光の聖徳太子が祀られている。その後の日には、さらに様々な明神の太子像が追加されて、統一的に、多くの人々に祀られてきたのであろう。この図には、次のようないわれがある。

江戸時代の「新編武蔵風土記」に紹介されている。この頃だけの聖徳太子像を離れた千疋村に移した。ところが、地元の四条村に移された先の千疋村の住民の間で、新賀や良い、と云う者が出た。そこで、千疋村の聖徳太子像に反対して、千疋村の太子像が追加された。この聖徳太子像の他に、聖徳太子像がある。その中に交じって、図1と図2の庚申塔がある。聖徳太子像が祀られているため、最下部に描かれているであろう三層の塔が見られないのが特徴である。

##### (2)南百農村センター

この山前に墓地がある。かつては「五輪院」と称した寺の跡地である。ここに大きな丸彫りの地蔵菩薩像がある。それが図9である。

##### (3)南百の不動堂

お盆及び本尊の不動菩薩は、もとはずや南方にあつた(尾手無)東町二一九五より移転して来たものである。中川の拡張により、さらに今後移転することになっている。ここにも庚申塔がある。図8、9、10である。図10には、地元の徳見、鈴木、中村、平林の名字が見られる。

##### (4)中村家(東町二一八六)跡

図11は、進して入るを無した庚申塔である。石塔の南側に、「西へ道」「時、さうかざり」と刻まれている。

#### 旧四・八条村

##### (一)飯塚家(久兵衛橋一)墓地

墓塔が「久兵衛橋」と呼ばれた四條村の名主を勤めた飯塚家の墓地である。この墓塔は、その上石油のカリンスランド(東町二二二〇)の鈴木(大)の五メートル南にある。かつては杉山に囲まれ、大師堂もあったという。現在は狭くなり、墓地のみとなっている。これと中川の拡張により移転されたものである。

ここに如意輪観音菩薩の石仏(図1)がある。江戸時代初期のぼろぼろい出来栄である。飯塚家の財力強さがうかがいられる。

##### (2)妙音院墓地(四条本町の集落)

もつ、妙音院と呼ばれた寺院があった所である。

図4は、市内「番古」六十六部郡國守である。日本国内の六十六部郡に経路を納め、回り終った祀立の神である。交通機関のない当時としては大変なことである。図8は、神社仏閣のお盆巡りが完了したのを記念して造立したものである。数にもを言わせて功徳を得ようとする百鬼夜行は、願吉屋・願吉屋・大師堂・阿陀陀堂などさまざまなお盆巡りしたものである。江戸時代初期の主に寛文間期、新三真直部から十真直、交枝様にかけて見られた。図7、9はすべて庚申塔である。

##### (3)日辰神社

四條村の鎮守である。江戸時代は山王社と呼ばれた。明治に村内の天神社と稲荷社を合併している。日辰神社は、もと吉徳橋の南側の三三三メートル程先の川川の河口敷にある。

##### (4)東葉寺墓地(千疋南農村センター)

千疋村の丁徳が六十六部を祀り終った。全国を回った記念に造立したものである。図8は、ここが四條村八十八箇所の弘法大師(聖徳太子)の一つであることを示している。四條村は、足立方面(瀬江、瀬江、瀬江)の西側、吉川方面の二合土、八瀬方面の八条川の四方面をさす。別府村の慈徳寺(今の金剛寺)は、一丁前の六十二部の札所である。六十五番は神の本の真徳院である。

##### (5)龍徳神社(南南神社)

図15の龍徳塔は、この地が龍徳(行田市)の飛び地であったために明治初期に建立されたのである。図15の天正とは、生願(天正)をさす。八坂神社(坂岡)の神様である。図12は、当時の怒る流行病である(天然痘)を追い払うために龍徳神を祀った石塔である。

##### (6)鈴木家の邸内(千疋)

東町三一一三三の鈴木家の邸内(千疋)は、地元の「千疋」と申す「大光明寺」と刻まれた石塔がある。年代は刻まれている。

##### (7)大光明寺(千疋)

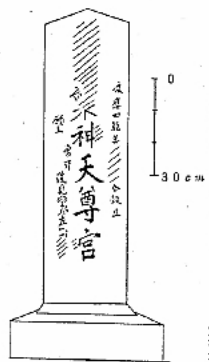
大光明寺は、足元区にある花園(江戸時代は住持村と呼ばれた)の大光明寺(千疋)とも呼ばれ、図15の神様である(の神様をさす)と思われる。

##### (8)大光明寺(千疋)

大光明寺は、江戸時代は寛大明神社と呼ばれ、その本来の神様の姿は、寛大明神社とお祈り塔と連われる。

# 旧南百村

1. 南百村「水神」文字塔



水神社

4. 青面金剛像庚申塔



水神社

7. 不動明王三尊像



南百の不動堂

2. 青面金剛像庚申塔



水神社

5. 青面金剛像庚申塔



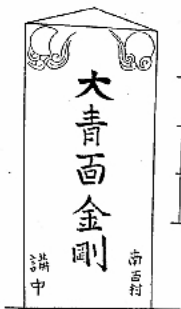
水神社

8. 青面金剛像庚申塔



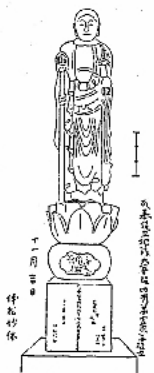
南百の不動堂

3. 文字庚申塔



水神社

6. 地藏菩薩像



什九妙体

9. 道標付き文字庚申塔



南百の不動堂

10. 青面金剛像庚申塔



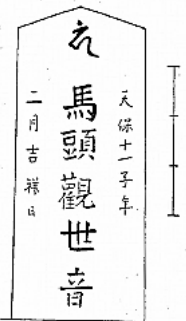
南百の不動堂

2. 「馬頭観音」文字塔



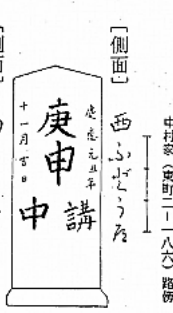
飯沼次(久兵衛様)墓所

5. 「馬頭観音」文字塔



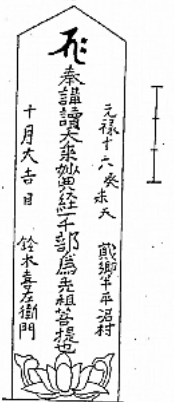
妙音院墓地

11. 道標付き文字庚申塔



中村家(寅町一十八の墓所)

3. 法華経供養塔



妙音院墓地

6. 地藏像付き百堂巡礼塔



妙音院墓地

1. 題目付き如意輪観音像



飯沼次(久兵衛様)墓所

4. 六十六部廻国塔



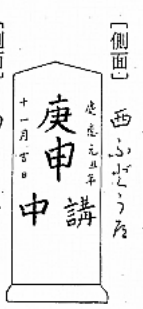
妙音院墓地

7. 青面金剛像庚申塔



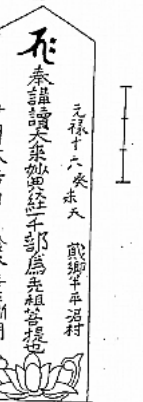
妙音院墓地

# 旧四条村



徳元元年十一月廿二日

南さうかた



元禄十六年庚申年正月

十月大吉日 鈴木喜左衛門

7. 青面金剛像庚申塔



妙音院墓地



元禄七年九月廿四日

同日即白

8. 四條  
青面金剛像庚申塔

妙音院墓地



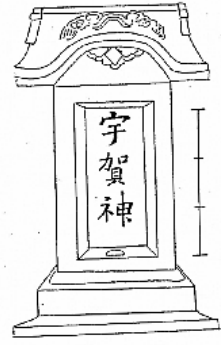
9. 四條  
青面金剛像庚申塔

妙音院墓地



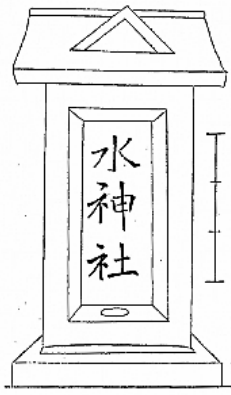
10. 四條  
「宇賀神」文字塔

日枝神社



11. 一  
「水神社」文字塔

日枝神社



12. 四條  
文字庚申塔

日枝神社



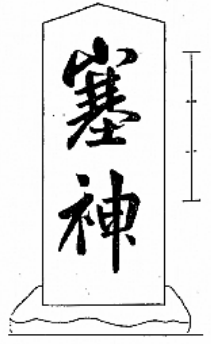
13. 四條  
道標付き塞神塔

日枝神社



14. 四條  
塞神塔

日枝神社



15. 四條  
二童子付き文字庚申塔

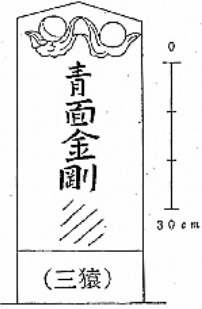
さなえ幼稚園の西



### 旧別府村

1. 別府  
文字庚申塔

金剛寺



2. 別府  
青面金剛像庚申塔

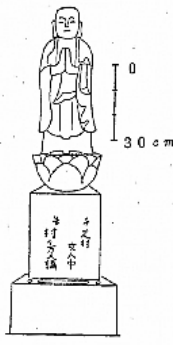
金剛寺



### 旧千足村

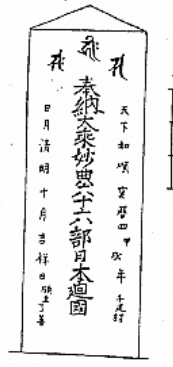
1. 千足  
地藏菩薩像

東葉寺墓地



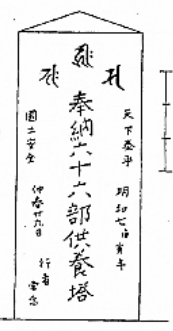
2. 千足  
六十六部廻国塔

東葉寺墓地



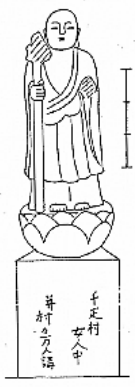
3. 千足  
六十六部廻国塔

東葉寺墓地



4. 千足  
地藏菩薩像

東葉寺墓地



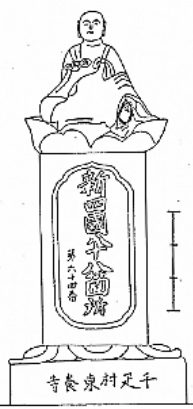
5. 千足  
地藏菩薩像

東葉寺墓地

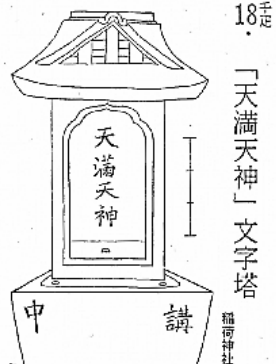


6. 千足  
「新四国八十八箇所」標識石塔

東葉寺墓地



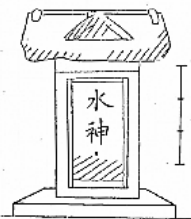




18<sup>千</sup>足

「天満天神」文字塔

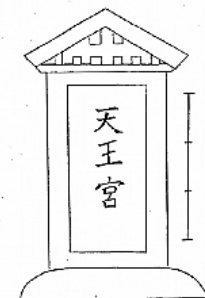
稲荷神社



17<sup>千</sup>足

「水神」文字塔

稲荷神社



16<sup>千</sup>足

「天王宮」文字塔

稲荷神社



9<sup>千</sup>足

地蔵菩薩像

東葉寺墓地



8<sup>千</sup>足

青面金剛像庚申塔

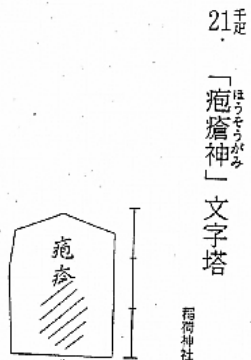
東葉寺墓地



7<sup>千</sup>足

青面金剛像庚申塔

東葉寺墓地



21<sup>千</sup>足

「疱瘡神」文字塔

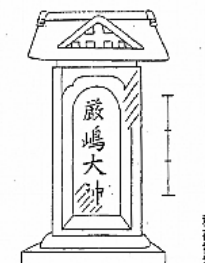
稲荷神社



20<sup>千</sup>足

「稲荷大明神」文字塔

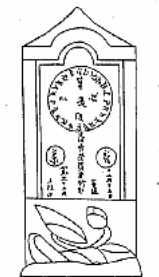
稲荷神社



19<sup>千</sup>足

「嚴嶋大神」文字塔

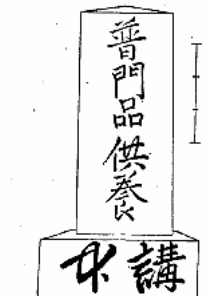
稲荷神社



12<sup>千</sup>足

光明真言曼陀羅塔

東葉寺墓地



11<sup>千</sup>足

普門品供養塔

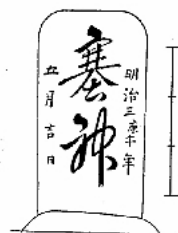
東葉寺墓地



10<sup>千</sup>足

青面金剛像庚申塔

東葉寺墓地



15<sup>千</sup>足

塞神塔

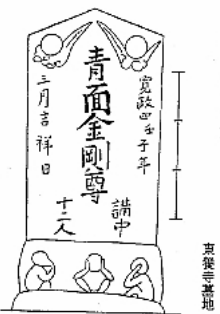
稲荷神社



14<sup>千</sup>足

「水神社」文字塔

稲荷神社



13<sup>千</sup>足

文字庚申塔

東葉寺墓地

# 南百・四條・別府・千足の石仏案内図

## 南百村

- (1)水神社 No. 1~5
- (2)南百農村センター(宝性院跡地) No. 6
- (3)南百の不動堂 No. 7~10
- (4)中村家(東町二一八六)路傍 No. 11

## 四條村

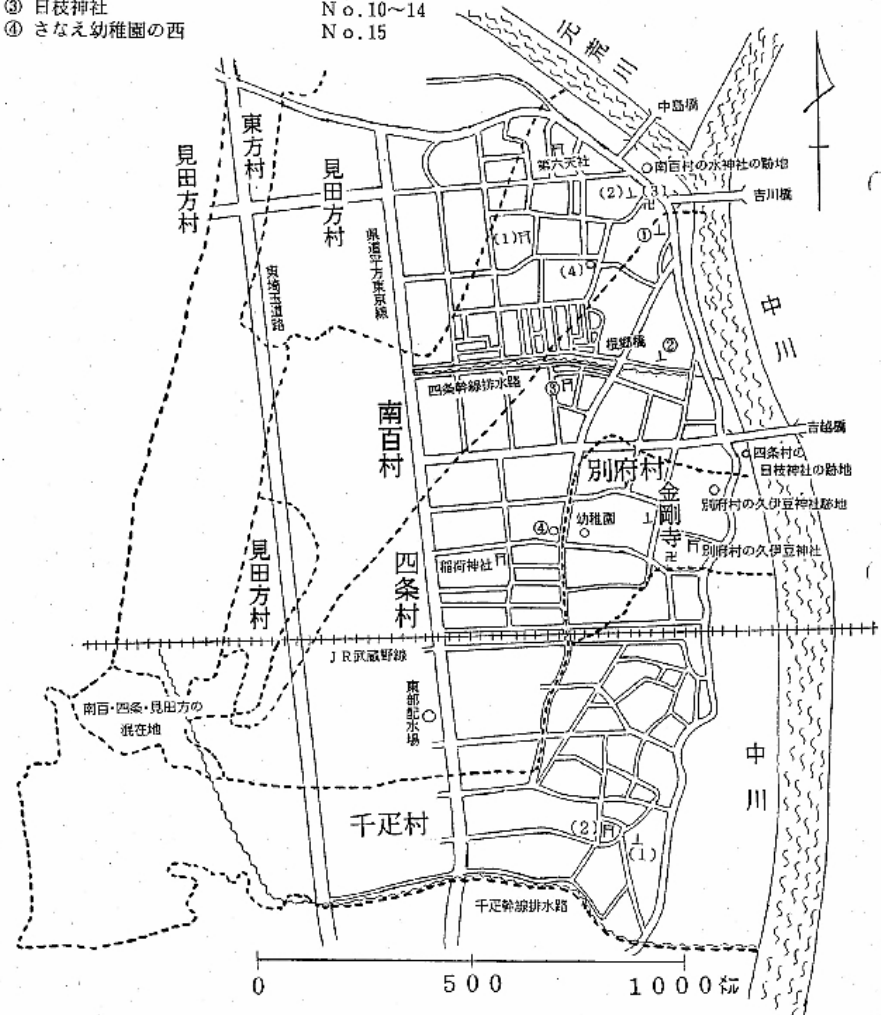
- ① 飯島家(「久兵衛様」)墓地 No. 1・2
- ② 妙音院墓地(四條本田の集会所) No. 3~9
- ③ 日枝神社 No. 10~14
- ④ さなえ幼稚園の西 No. 15

## 別府村

- 金剛寺 No. 1・2

## 千足村

- (1)東養寺墓地(千足南農村センター) No. 1~13
- (2)稲荷(伊南理)神社 No. 14~21



「郷土越谷散策」のスタンプラリーのパンフレットの請求や問い合わせ先は、  
下記の越谷市観光協会の中村、上野か、越谷市産業支援課までお願いします。

# 郷土越谷散策



総距離7.8km

11月1日(火)～27日(日)



## 久伊豆神社

本社は寛政元年(1789)に建立されたものであり、第三鳥居は、伊勢神宮第61回遷宮に際し、撤下された皇大神宮の南板垣御門の古材を用いて建立されたものです。境内の藤は、埼玉県指定の天然記念物です。

## 天嶽寺

本浄土宗至聖山遍照院天嶽寺は、京都知恩院(浄土宗総本山)の直末であるところから、総本山の大僧正の願居寺でもあります。本堂に安置されている「木造釈迦如来涅槃像」は、立像、坐像の多い中できわめて珍しいものです。

## 越谷御殿跡

越ヶ谷御殿は、徳川家康放鷹時の宿泊所として、慶長9年(1604)に設営されました。家康、秀忠はしばしば鷹狩りに越ヶ谷を訪れています。

## キャンベルタウン公園

昭和59年、越谷市とオーストラリアのキャンベルタウン市との間で、姉妹都市提携がされたのを記念して、昭和61年に髙野第五公園を「キャンベルタウン公園」と名付けました。両市民の友情の証として記念碑が設置され、オーストラリアをイメージしたシンボル塔が建っています。

## キャンベルタウン野鳥の森

越谷市とオーストラリア、キャンベルタウン市との姉妹都市提携十周年を記念して、キャンベルタウンから送られるオーストラリアの(自然)を理解することを願って建設されたものです。

## 越谷能楽堂 花田苑

日本の伝統芸術文化の振興と市民文化の向上の施設として、毎年、夏には「こしがや新能」が開かれます。また、隣接する花田苑庭園内には約14,000本の樹木が植えられ、四季の花や紅葉が楽しめます。

## 要 項

- ① 会期 平成17年11月1日(火)～27日(日)
- ② 内容 郷土越谷を巡るスタンプラリー形式の散策ハイキング
- ③ スタンプ設置箇所  
●久伊豆神社(9時～17時)  
●キャンベルタウン野鳥の森(9時～17時)\*月曜休  
●花田苑(9時～15時)
- ④ 裏面の「□」内に、各施設のスタンプ設置場所にてスタンプを1つづつ押しして下さい。  
(同一の施設でのスタンプの押印はご遠慮下さい。)

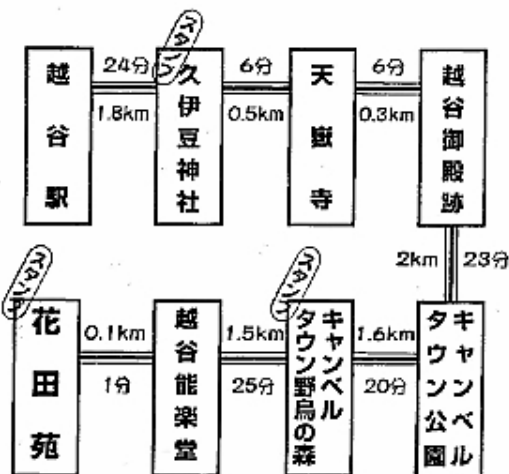
## 抽 選 会

- 日時 平成17年11月26日(土)・27日(日)  
午前10時～15時(両日)  
場所 越谷総合体育館 越谷市増林2丁目  
(こしがや産業フェスタ2005)  
資格 指定されているスタンプ全てを押印された方。\*抽選にて賞品が当たります。  
(はずれなし)

## お 願 い

- ① 歩行中の喫煙はおやめください。また、ゴミは自宅までお持ち帰り下さい。
- ② 花や木は、折ったり、抜かないで下さい。
- ③ ケガ、事故等における責任は当方では負いかねます。

主催 越谷市観光協会 電話 048-966-6111  
越谷市産業支援課 電話 048-967-4690



#### 4. 越ヶ谷宿の大澤に泊まった伊能忠敬

金岡 由紀子

一八〇〇年(寛政十二年)閏四月十九日・蝦夷地測量に向かった伊能忠敬ら一行は、北千住で見送りの人々と別れの宴を持ち、その夜は越ヶ谷宿の大澤の「中嶋屋善太郎宿」(現時点での所在地不明)に泊まった。(＊1)

この時、忠敬は五十一歳。二十数年にわたる日本測量の始まりであった。幕府天文方の「御用」ではあったが、費用はかなり、自分持ちの旅であった。百両以上を自費でまかっている。

当初の予定では伊能が測量する受け持ちは「東日本」のみであった。「西日本」は伊能の師である「高橋至時」<sup>よしとき</sup>の盟友で大坂住まいの「間重富」<sup>はざましげとみ</sup>の担当予定だった。

しかし、間の家が一八〇三年(享和三年)三月二日に火事の類焼を受けたため、伊能が「西日本」も測量する事になったのである。(＊2)

現在では伊能は「日本全国を測量した」という事で「地理学者」となっている。(＊3)

では、勘解由さん本人(伊能忠敬は間と高橋の手紙では勘解由という名で登場する)に、「あなたのお仕事は何ですか?」と尋ねたら何と答えるでしょうか?ちなみに、公式の記録では「下総国香取郡佐原村の元百姓当時(「現在」という意)浪人・蝦夷地測量御用を受け賜った高橋作左衛門(至時・天文方)の弟子・伊能勘解由」というのが、測量開始時の彼の立場である。

#### 参考文献

- \* 1 『伊能忠敬測量日記』昭和六三年 千葉縣史料・近世篇。千葉原刊
- \* 2 『日本洋学史の研究1』昭和四三年 有坂隆道著・創元社刊
- \* 3 『日本郵便切手』一九九五年『伊能忠敬・地理学者 生涯250年』

## 5. 越ヶ谷音頭

高崎 力

戦前から現在までの越ヶ谷の歌の変遷は次のとおりである。

### 《戦前の「越ヶ谷音頭」》

昭和の初期に「草加・越ヶ谷、千住の先よ。」で始まる「越ヶ谷音頭」が作られた。地元越ヶ谷の特色がよく出ている。作曲者は、当時有名な町田嘉章氏で、作詞者は地元の出羽村の野口紅堂氏である。踊りの振り付け師の名前は不詳である。この時に、同じ曲で「四季の越ヶ谷」の歌詞も野口紅堂氏によって作られた。

「越ヶ谷音頭」は、昭和五年（一九三〇）八月三日にラジオ放送で全国に紹介された。

### 《戦後の「越ヶ谷音頭」》

昭和三十三年（一九五八）の越ヶ谷の市政施行記念として「ハア、綾瀬、古利根、元荒川の」で始まる「越ヶ谷音頭」が作られ、越ヶ谷小学校の仮設舞台で発表会がなされた。

作詞は「越ヶ谷音頭作成会」、作曲は山口俊郎氏、歌は林伊佐緒氏、大津美子氏、キング合唱団、三味線は豊吉、豊藤の両氏である。

### 《現在の「越ヶ谷市の歌」》

昭和五十二年（一九七七）、市政二〇周年を記念して制定された「越ヶ谷市の歌」は、一五四篇の応募作品の中から、椎木一男さん（市内宮本町三丁目）の作品が選ばれた。

この詞に大宮市在住の詩人宮沢章二さんが補作し、与野市在住の作曲家の奥村一さんが行進曲風の明るい感じの曲をつけた。

※戦前の「越ヶ谷音頭」に関する情報がありましたら、何でも結構ですので、是非お寄せください。例えば、「越ヶ谷音頭」の記念写真の人物やその他に関する事、  
「越ヶ谷音頭」の踊り方についてなどです。

なお、ご連絡先は、左記のとおりです。

〒343-0041 越谷市 千間台西 二一七-一六 宮川進方

NPO法人・越ヶ谷市郷土研究会

☎048-9975-9139 (宮川進)

# 昭和初期の「越ヶ谷音頭」

## ◆ 越ヶ谷音頭

作詞 野口 紅堂  
作曲 町田 嘉章

1 草加越ヶ谷千住のさきよ トコサイ

東武電車でひと走りひと走り

ハヤシお前と私は御嶽の鴨場

そつと目と目で合圖する

トコサイ

2 花のさきがけ越ヶ谷梅よ トコサイ

天の浮橋影映る影映る

ハヤシお前と私は太郎兵エの餅よ

搦いて搦かれて味が出る

トコサイ

3 越ヶ谷外れて埼玉鴨場 トコサイ

池の水鳥さわくとさわくと

ハヤシお前と私は御嶽の鴨場

そつと目と目で合圖する

トコサイ

4 越ヶ谷名物数ある中に トコサイ

米と糯米 縄 蕨 細むしろ

ハヤシお前と私は太郎エの餅よ

搦いて搦かれて味が出る

トコサイ

9 可愛いお酌で川魚料理 トコサイ

川の隅のや清々し 清々し

ハヤシお前と私は御嶽の鴨場

そつと目と目で合圖する

トコサイ

10 蒲生越ヶ谷田植の名所 トコサイ

明治帝の行幸跡 行幸跡

ハヤシお前と私は太郎兵エの餅よ

搦いて搦かれて味が出る

トコサイ

11 稲の穂波は越ヶ谷田は トコサイ

東筑波根西に不二 西に不二

ハヤシお前と私は御嶽の鴨場

そつと目と目で合圖する

トコサイ

12 越ヶ谷驛から半道西へ トコサイ

稲で名高い出羽の里 出羽の里

ハヤシお前と私は太郎兵エの餅よ

搦いて搦かれて味が出る

トコサイ

5 音に開えた大相模不動 トコサイ

古き由緒は御座の松 御座の松

ハヤシお前と私は御嶽の鴨場

そつと目と目で合圖する

トコサイ

6 桜の越ヶ谷明るい町よ トコサイ

つゞく大澤よるの里 夜の里

ハヤシお前と私は太郎兵エの餅よ

搦いて搦かれて味が出る

トコサイ

7 桃の越ヶ谷住みよいところ トコサイ

清き荒川泳ぐ鯉 泳ぐ鯉

ハヤシお前と私は御嶽の鴨場

そつと目と目で合圖する

トコサイ

8 釣りをするなら越ヶ谷ちかく トコサイ

お出で待たます鯉と鯉と鯉

ハヤシお前と私は太郎エの餅よ

搦いて搦かれて味が出る

トコサイ

## ◆ 四季の越ヶ谷

作詞 野口 紅堂

1 春の遊びは越ヶ谷来ませ トコサイ

藤で名高い久伊豆へ 久伊豆へ

ハヤシお前と私は御嶽の鴨場

そつと目と目で合圖する

トコサイ

2 夏の遊びは越ヶ谷来ませ トコサイ

月の荒川夕涼夕涼み

ハヤシお前と私は太郎兵エの餅よ

搦いて搦かれて味が出る

トコサイ

3 秋の遊びは越ヶ谷来ませ トコサイ

萩の花見は至登山 至登山

ハヤシお前と私は御嶽の鴨場

そつと目と目で合圖する

トコサイ

4 冬の遊びは越ヶ谷来ませ トコサイ

何時も花咲く試験場 試験場

ハヤシお前と私は太郎兵エの餅よ

搦いて搦かれて味が出る

トコサイ

昭和5年8月3日に「越ヶ谷音頭」をラジオの全国放送した時の記念写真

・「越ヶ谷音頭」の作詞者、作曲者、踊りの振り付け者の人物が写っている。

・作詞者は、地元の出羽村の野口紅堂氏。

(氏 付 振)

(氏 曲 作)

(氏 詞 作)



き 演 出 送 放 日 三 月 八 年 五 和 昭

「越ヶ谷音頭」の踊りの様子

「東京毎夕新聞社」の文字が見られる。



花のさきがけ  
越ヶ谷橋よ  
トコナイ  
天の浮橋  
影映る  
お前と私は  
御籠の鳴塔  
ソツと  
目と目で  
会圖する  
トコナイ

# 越谷音頭

1811

作詩 越谷音頭作成委員会  
作曲 山口俊郎  
歌 林伊佐雄・大津美子  
キング合唱団・三味線 豊吉、豆腐

ハハアー

綾瀬 古利根 元荒川の

水が産湯の 越谷育ち

エー 意気もとけあうヨ 拾の里

ヨイ ヨイ ヨイヨイ 拾の里

ハハアー

主と交踏みや お狩場あたり

梅もほころぶ 情のかほり

エー 帰る鴨さえヨ 夫婦づれ

ヨイ ヨイ ヨイヨイ 夫婦づれ

ハハアー

藤の久伊豆 願いをかけて

渡る寺橋 また平和橋

エー 燃える思いはヨ 不動橋

ヨイ ヨイ ヨイヨイ 不動橋

ハハアー

西に富士ヶ嶺 東に筑波

間の早乙女 あかねのたすき

エー やがて稔りのヨ 月が照る

ヨイ ヨイ ヨイヨイ 月が照る

ハハアー

ほんに越谷 住みよいところ

味は太郎兵衛の それ餅の味

エー 旅のお方もヨ 二度三度

ヨイ ヨイ ヨイヨイ 二度三度

## 昭和三十三年の「越谷音頭」



## 越谷市の歌

作詞 椎木一男  
 補作 宮沢章二  
 作曲 奥村 一

一、流れ 幾すじ 波おどり

空へ舞い立つ しらこぼと

歌おう 望みを よろこびを

水と みどりと 太陽の

わが市 わが町 越谷よ

二、花のいのちに 飾られて

愛が かおるよ 人の輪に

生きる日 励む日 夢みる日

共に 根を張り 幸を生む

わが市 わが町 越谷よ

三、昇る朝日の ほほえみは

今日と 明日を むすぶ虹

ひかりを集めて さわやかに

老いも 若きも 肩を組む

わが市 わが町 越谷よ

## 昭和五十二年の「越谷市の歌」

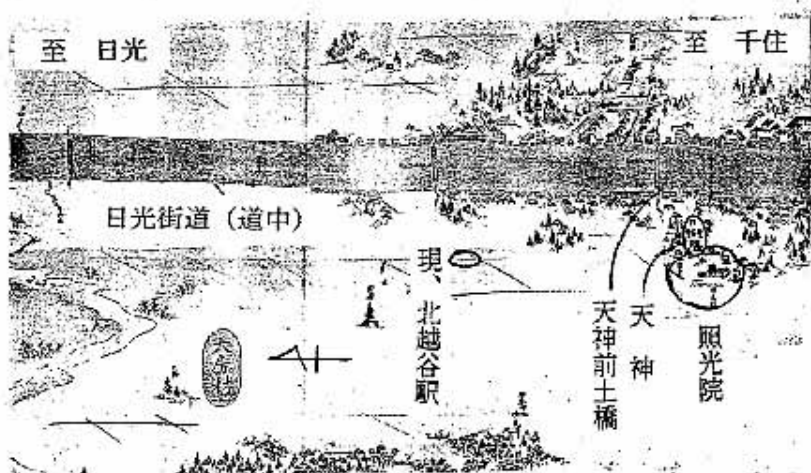
## 6. 大沢の天神前土橋

谷岡 隆夫

日光道中分間延絵図(文化三年)の道中(街道)筋に天神前土橋が掲載されている。現在の旧日光街道筋の越谷市大沢三丁目の水角屋の店脇(南側)である。今はその場所に橋はないが、排水溝が残っていて、排水溝の南側に「天神前橋」と書かれた石の欄干が一つ横たわって現存している。縦五二センチ、幅三〇センチ、奥行き二七センチ角である。昔は橋の両側にあり、昭和四〇年代の旧街道筋のU字溝整備の時に邪魔になったが、幸運にも業者が残してくれたとの古老の話である。江戸時代の地誌「大沢町古馬宮」によると、天神前土橋を境に北の日光方面を上町と称したとある。

この土橋から照光院方向に、この土橋の名前の由来となった天神様の神社(照光院参道北側)があった。現在はこの地になく、大沢の香取神社に合祀されている。

天神土橋の下を流れていた小川の流路に沿ったあたりは大沢町では一段と低い土地で、かつては荒川(現在の元荒川)が流れていた所という。宮内庁埼玉職場の南方、元荒川が曲流するあたり(北越谷第五公園グラウンド)から曲流せずに直流して南進し、北越谷駅南方を通じて東進し、天神土橋のあたりで旧街道を横切り、川が流れていた名残と思われる逆川(鷺後用水)周辺にある「七つ池」に沿って流れていたと推定されている(高崎力氏)。七つ池は、第二体育館(内池)、大沢小学校の北側(外池)、外池の逆川の対岸、逆川の対岸にある元、紡績工場の裏手(3カ所)、北越谷東口前通りの北側にあった。



日光道中分間延絵図



現在の天神前橋跡



天神前橋の欄干

## 7. 切橋の名前の由来

増岡孝司

越谷市は、昔から「水郷こしがや」と言われ、東端を古利根川と中川、南西端を綾瀬川、中央を元荒川と逆川（葛西用水）が流れているほか、新方川や八条用水、谷古田用水など河川や農業用水が縦横に流れています。

このため生活に欠かせないものとして多くの橋が架けられてきました。現在は八十八橋あります。このたくさんある橋の中で、「切橋」というちょっと変わった名前の橋があります。そこで「切橋」の名前の由来について調べてみました。

◎起源は江戸時代

荻島地内の北部を流れる元荒川に切橋という名前の橋が架かっています。「切」という名前からすると「通れない橋」のように思われますが、人々や自動車がこの橋を渡っています。それではなぜこの橋が切橋と呼ばれるようになったのでしょうか。話は江戸時代まで逆上ります。

昔の元荒川は今の流れとは違っていて、大竹のところから袋山を取り囲むようにして、恩間・間久里・大里・大林のそれぞれの村の袋山村との境に沿って大きく曲流、迂回して流れていました。

江戸時代初期の寛文四年（一六六四）に瓦曾根溜井の堰の漏水を防ぐために、石の堰に改められました。そのために元荒川は大雨が降るたびに上流に逆流するようになり、曲流している袋山を中心に水害が多発しました。そこで袋山の人々は、江戸幕府に何とかしてもらえないものかと何回も嘆願しました。その結果、宝永三年（一七〇六）に大竹から大林までを真っすぐに流れるようにする大工事に切り掛かることになりました。

◎分離された荻島村をつなぐ橋

元荒川の改修工事を行うに当たっては、大竹と大林の曲流口の所がそれぞれ切られ、新しく真っすぐに川が掘られてつながりました。これにより袋山周辺の水害がなくなりました。

しかし、困った問題が起きました。それはこの新しい川によって荻島村の一部が川の向こう岸に離れてしまったことです。この改修工事によって荻島村から切り離された集落は当時「切地」と呼ばれていました。そこで本村との間に橋が架けられました。その橋を「切橋」と名付けられました。ちなみに「切」とは、川の改修でもと流れていた川筋が切られたという意味です。これが「切橋」と呼ばれるようになった由来です。

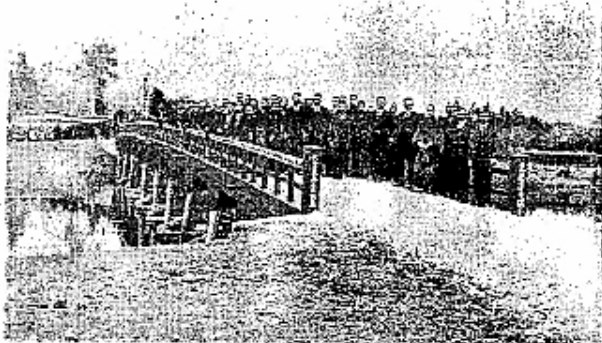
◎現代の切橋

切橋は、江戸時代から現在まで数回架け替えられてきました。今の橋は昭和十二年に架け替えられたもので、長さ五四・二メートル、幅三・七五メートルのコンクリートの橋です。橋の幅が狭いため、車がすれ違うのは困難ですが、大袋地区と荻島地区とを結ぶ大切な橋として多くの方々に利用されてきました。

◎歩行者と自転車専用の橋に

切橋の上流約六百メートル先に、大竹と砂原とを結ぶ新しい橋「大砂橋」が平成十七年七月十一日（月）に開通しました。これにより切橋は歩行者と自転車の専用橋となりました。

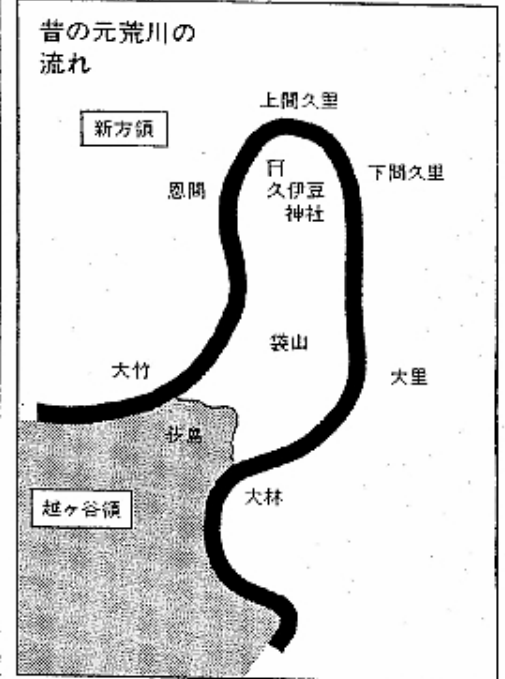
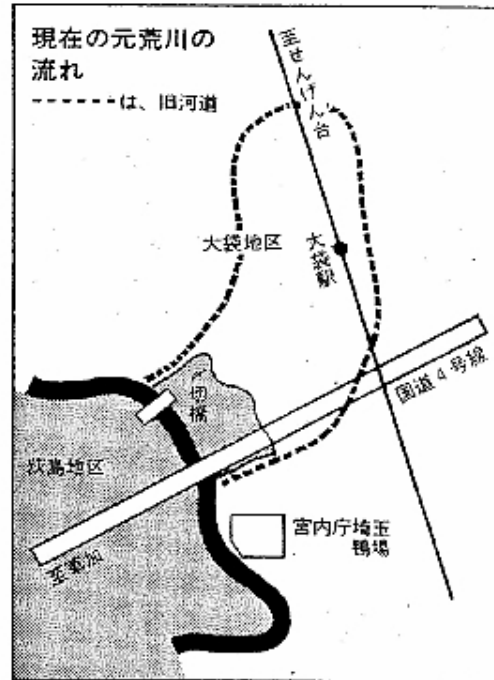
※本文作成にあたっては、越谷市広報広聴課・越谷市立図書館にご協力いただきました。



大正13年のノ切橋の竣工式



現在のノ切橋



現在と改修する前の元荒川

# 大昔の越谷は海だったか

宮川 進

越谷の地面を深く掘ると貝殻が出てくるから、そして春日部市や遠く栃木県の藤岡町にも縄文時代の貝塚があるのだから、大昔の越谷は海だったといわれます。

しかし、「大昔」というのは「何時ごろ」のことをいうのでしょうか。たしかに関東地方の内陸部に貝塚がありますが、それらの貝塚は縄文時代前期（いまから6千年位前）、地球が温暖化した時期に北極、南極の氷が融け海水面が上昇、貝塚があったあたりまで、海水が来た時期につくられたものです。この海水面の上昇

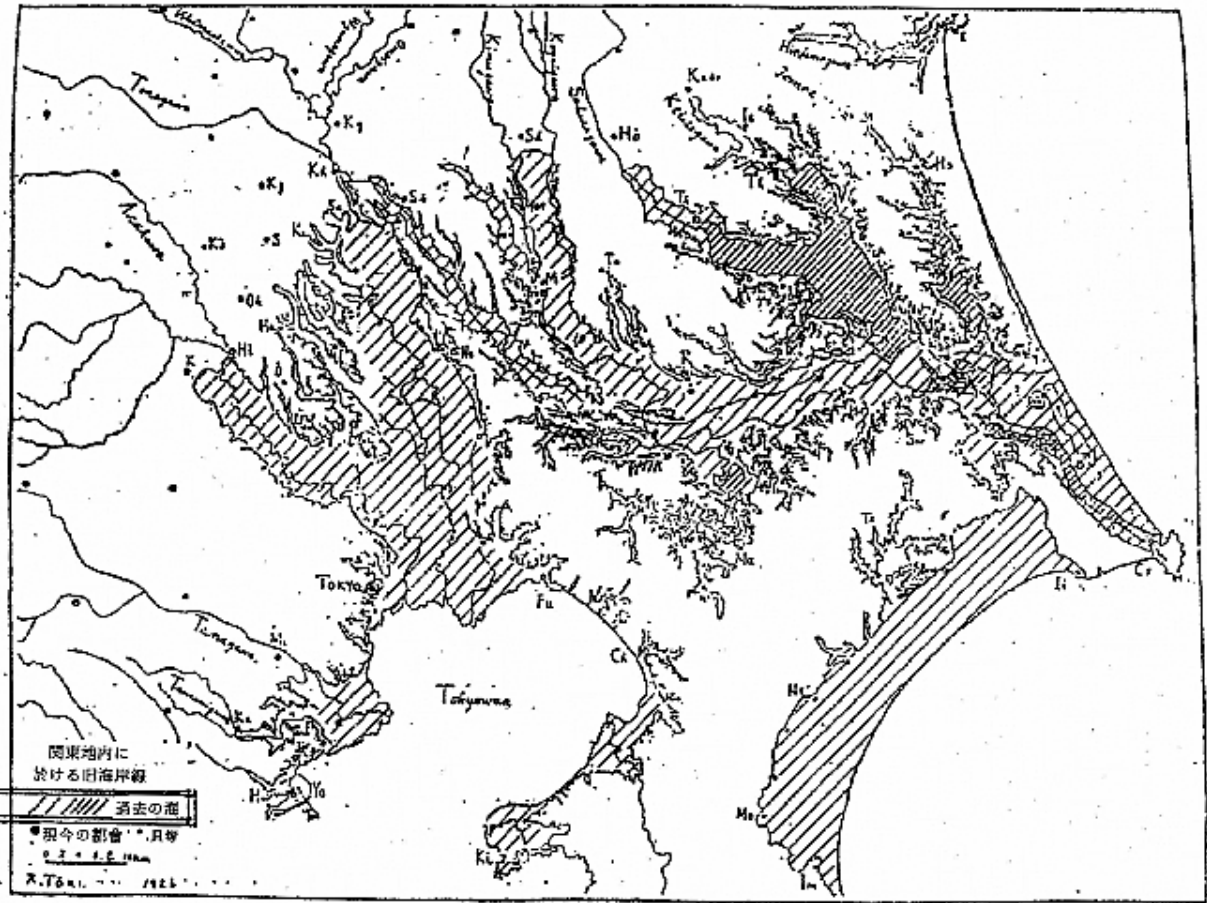
（縄文海進）は、一般的には5千年前にはおわったと言われています。（図②）

しかも、海と陸はいまのように、はっきりと分かれたものではなく、満潮のときは海、干潮の時は陸となる「干潟」もありました。だから、海が内陸の奥まで入っていた時期でも、越谷は海も干潟も陸もあつた状態であつたとも思われます。

また、貝殻が出るといっても、その貝殻の時代に越谷が一時期、海だったこともあるという証拠にしかないのです。

この「越谷は大昔、海だった」という俗説に影響を与えた元凶は大正時代に発表された東木竜七氏の左の図（図①）でしょう。しかし、これは当時、発見された縄文時代の貝塚を約一万年続いた縄文時代の前期、後期も区別せずにつないだ非常に問題の多いものです。最近では越谷でも縄文、弥生、古墳時代、平安時代と「古代」の遺跡が発見されており、「大昔」は海だったという説が間違いであったことが、はっきりしてきています。（図③）

図①



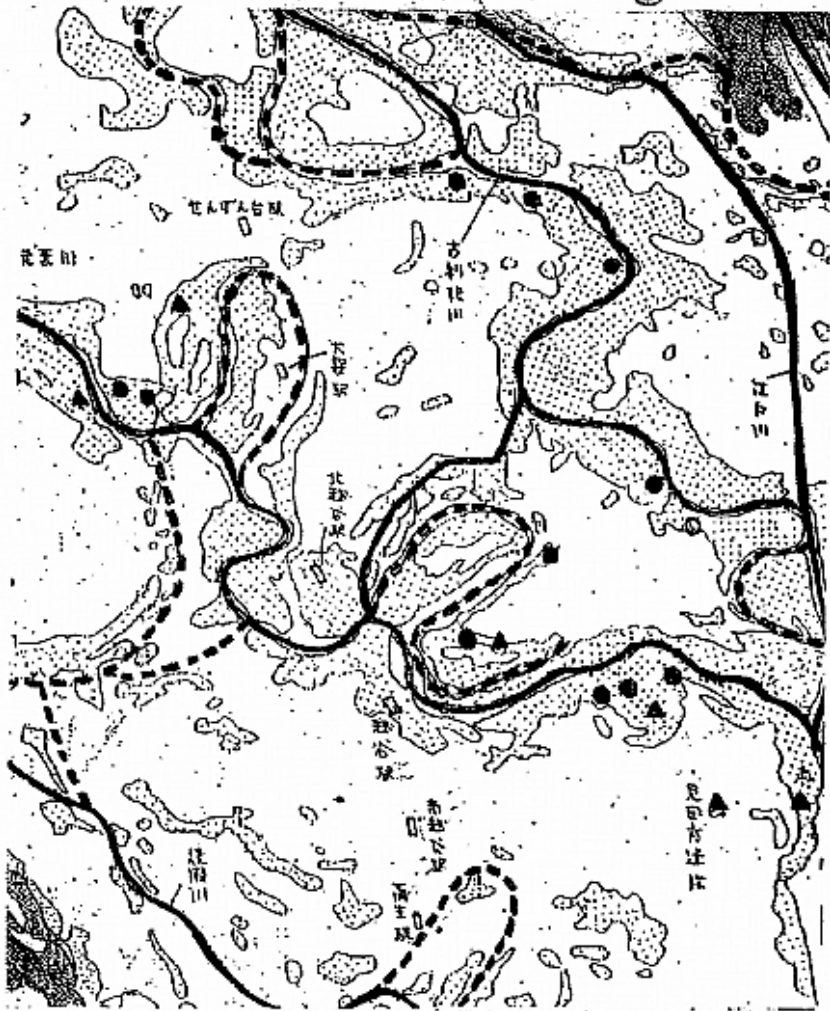
東木竜七 「地形と貝塚分布より見たる関東低地の

旧海岸線」 地理学評論第2巻7・8・9号

(1926)

埼玉県東部低地遺跡分布区

③



〰 現河川    - - - 過去の河川流路(一部仮)    ■ 台地    ● 自然堤防  
 ※土地分譲地調査 大宮(埼玉県埋蔵文化財調査 73・3発行)、前橋(埼玉県埋蔵文化財調査 80・3発行)の  
 結果を反映した。○=縄文時代 〇=弥生時代 ▲=石段時代 ●=平安時代  
 埼玉県東部低地における遺跡調査報告 宮川道一 熊谷市郷土研究会会報第  
 7号(「H4」57号)の地図に山本要秀氏の熊谷市増林での調査成果を加筆

②

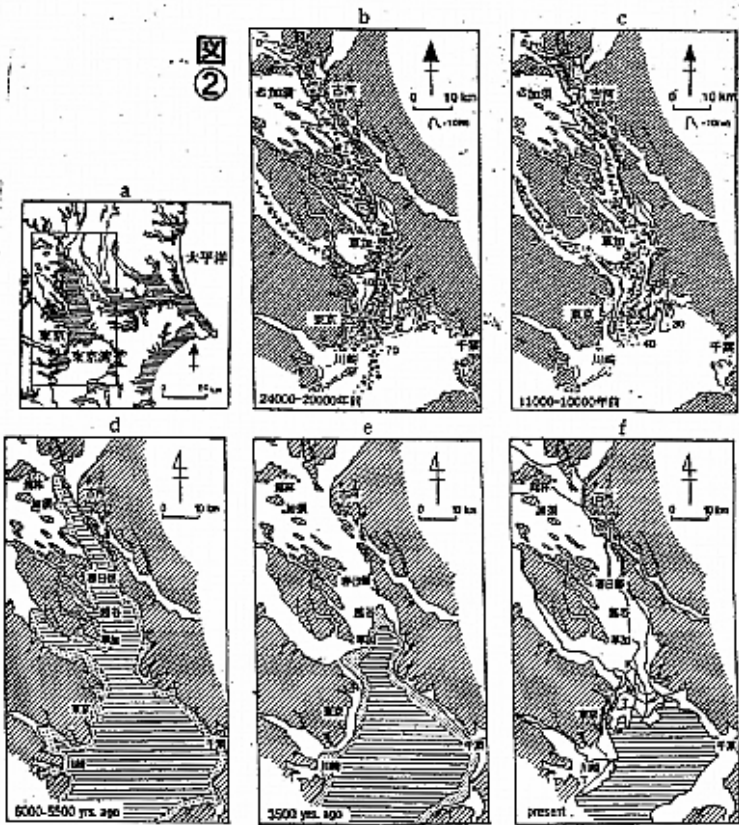


図1-12 関東平野の過去24,000年間の環境変遷—海と陸の変化を中心に—  
 (遠藤ほか 1983a、遠藤ほか 1988d、小杉 1989、久保 1989、小杉 1992、  
 遠藤 1996等に基づく)  
 (注) a: 縄文海進最盛期の海の侵入範囲とb~f図の範囲 b: 24,000~20,000年前  
 c: 11,000~10,000年前 d: 6,000~5,500年前 e: 3,500年前  
 f: 古墳時代~現在 (K: 古墳時代 M: 中世 T: 大正時代)

草加市史 通史編上 H9.3

# 越谷市郷土研究会に入ってみませんか！

## NPO法人・越谷市郷土研究会とは

(平成17年10月現在)

- ◎史跡めぐりなどのイベントを毎月実施し、また、毎年、越谷市民まつり・越谷市民文化祭・こしがや文化芸術祭に展示部門で参加しております。
- ◎当会は、昭和40年(1965)3月に発足しました。以後地道に活動し、現在は会員数が320名を越えるの大所帯となりました。ほぼ毎月行われる史跡めぐりは345回を数えるまでになりました。
- ◎平成16年1月24日に

### 『NPO法人・越谷市郷土研究会』

の設立総会を開き、5月27日に法人格を取得し、正式に発足しました。

- ◎当会の最近の主なイベントをあげますと次のとおりです。

- 平成17年1月 3日(月) 恒例の七福神めぐり(下谷方面)
- 平成17年1月23日(日) 歴史講演会・「越ヶ谷宿(越ヶ谷町・大沢町)」
- 平成17年2月16日～3月6日 市立図書館における「江戸時代の越谷」展
- 平成17年2月26日(土) 永田町・霞ヶ関・日比谷・汐留・芝の増上寺
- 平成17年4月 2日(土) 自然が残る春日部の古利根川土手道散策
- 平成17年4月12日(火) 越谷と鶴場(鶴場見学)
- 平成17年4月28日(木) バス史跡巡り・足利の藤をライトアップで見る
- 平成17年5月29日(日) 越谷市内・大相模の史跡巡り
- 平成17年7月22日(金) 府中(武蔵国府・古戦場・宿場の町)めぐり
- 平成17年8月20日(土) 「越谷歴史たんけん隊」(子供史跡めぐり)
- 平成17年8月27日(土) 郷土研究会創立40周年・NPO化1周年記念歴史講演会「江戸時代の越谷に学ぶ」(講演者は江戸東京博物館館長・竹内誠氏、後援は教育委員会、文化連盟)
- 平成17年9月 3日(土) 「埼玉古墳たんけん隊」(子供史跡めぐり)
- 平成17年9月 6日(火) 上野公園散策(国立博物館、東照宮、岩崎邸)
- 平成17年10月23日(日) 「つくばエクスプレス」で宇宙に行こう

- ◎郷土研究会ニュース「りせ」の発行

- ◎会報『古志賀谷』の隔年の発行(B5版、百～百五十頁程度)及び無料配布  
内容は主に会員による郷土の調査・研究の報告や随想の寄稿文などです。

※なお、以上の他に、越谷市社会福祉協議会への寄付や文化財パトロールの活動なども行ってきました。

## 郷土研究会にお入りになるには

- ◎会費は、年間2千円(4月～翌年3月、会報・諸案内状・諸会議費等)です。どなたでも気楽に入会できます。市外の方でも歓迎致します。
- ◎申し込みは、はがきに「平成何年度より入会」とお書きのうえ、住所・氏名・電話番号をご記入し、下記までお寄せ下さい。  
または、当会の各種行事の際に、郷土研究会役員までお申し込み下さい。

〒343-0041 越谷市 千間台西 2-17-16 宮川 進方  
NPO法人・越谷市郷土研究会  
☎048-975-9139